毛利家文庫の絵図「〔肥後熊本城略図〕」について

—加藤氏時代の熊本城に関する研究 (その1)—

THE DRAWING “HIGO-KUMAMOTOJO-RYAKUZU” IN MOURIKE-BUNKO

A study on Kumamoto Castle in the Kato family's days (Part 1)

小野 将史*, 北野 隆**

Masashi ONO and Takashi KITANO

This is a study on the history of the drawing “Higo-kumamotojo-ryakuzu”, which was found in the Monjokan of Yamagutiken. The results are as follows:

1. The Hagi-Clan made private inquiries clans in northern Kyushu in 1612. At that time, the drawing was painted by the private inquirer of the Hagi-Clan that made private inquiries The Higo-Clan;
2. The drawing shows the situation of Kumamoto castle in the late Keicho eras that was not made clear before.

Keywords: Kumamoto Castle, Kato Kiyomasa, Kato Tadahiro, The Higo Clan, The Hagi Clan, Mourikebunko

熊本城、加藤清正、加藤忠広、肥後藩、萩藩、毛利家文庫

1. はじめに

加藤清正によって築かれた熊本城は、慶長12(1607)年には、その大凡が完成している¹⁾。加藤清正が、慶長16(1611)年に死亡した後は、その子である加藤忠広が遺領を相続して城主となったが、寛永9(1632)年に改易となったため、その後は、豊前小倉城主であった細川氏が国替によって城主となった。

加藤氏時代の熊本城を記した絵図は、現在の所、忠広代の状況を示すものが数点確認されているものの、そのどれもが城内の建造物については描かれていない²⁾。現在確認されている絵図の中で、熊本城内の建造物が記されている絵図のすべてが、細川氏時代に描かれたものである³⁾。熊本城の建造物などに関する研究は、すでに藤岡通夫博士をはじめとする諸研究があるが⁴⁾、加藤氏時代の熊本城の状況、特に城内の建造物に関する研究は、史料的制約があるため、いまだ十分な解明がなされているとは言い難い。

今回、加藤氏時代の熊本城の状況を表していると思われる絵図「〔肥後熊本城略図〕」(山口県文書館所蔵、毛利家文庫58絵図-830/図1)を見出した。「〔肥後熊本城略図〕」は、略記されたとと思われる所も見受けられるものの、今までに確認されていなかった加藤氏時代における城内の建造物や縄張などに関する状況が把握できる史料である。

そこで本稿では、関連史料を用いることにより、「〔肥後熊本城略

図〕」が描かれた年代とその背景について明らかにすることで、毛利家文庫の絵図「〔肥後熊本城略図〕」の史料的価値について考察を行っていくものである。

2. 「〔肥後熊本城略図〕」の構成について

「〔肥後熊本城略図〕」は、同じ内容(一方が下書で、もう一方が清書であると思われる)が描かれた二枚の絵図(原図)から成る(写真1)。「〔肥後熊本城略図〕」という名称は、目録中におけるものであり、これら二枚の絵図の表題は、一方が「肥後筑後城圖」(料紙の寸法(mm):475×1015、料紙の材料:楮紙または斐楮混漉紙、墨書/以下、「城圖」と略称)であり、もう一方が「肥後筑後両絵圖」(料紙の寸法(mm):475×980、料紙の材料:楮紙または斐楮混漉紙、墨書、表紙付/以下、「両絵圖」と略称)である。本稿では、この「城圖」と「両城圖」とが、同じ内容が描かれた絵図であることから、二枚の絵図をまとめて指す呼び名として、目録中の名称(「〔肥後熊本城略図〕」)を用いることとし、以下、これを「略図」と略称する。これら二枚の絵図の表題(「城圖」・「両城圖」)にもあるように、「略図」は、柳川城を中心とする筑後諸城の配置図と肥後熊本城図とが一对となって描かれている絵図(写真2)である。

「略図」が、なぜ同じ内容が描かれた二枚の絵図から成るのか、また、なぜ筑後諸城の配置図と肥後熊本城図とが一对となって描かれ

* 熊本大学大学院自然科学研究科 大学院生・修士(工学)

** 熊本大学環境システム工学科 教授・工博

Graduate Student, Graduate School of Science and Technology (Dr's Degree), Kumamoto University, M. Eng.

Prof., Dept. of Architecture and Civil Eng., Faculty of Engineering, Kumamoto University, Dr. Eng.

ている絵図なのか、これらの理由を含めて、「略図」がいつ、どのような目的で作製されたのかという点を明らかにすることで、「略図」中の熊本城が、いつ頃の状況を示しているのか明らかにしていくことにする。

3. 「略図」中の記述からみる熊本城の年代について

まず、「略図」中の記述から、絵図中の熊本城が、いつ頃の状況を示しているのか、みていくことにする。

「略図」中の南東方向、熊本城内と「かわ」を隔てた所には、「御はな島」という記述がある。これは、慶長15（1610）年にできたと思われる花島（畑）屋敷⁵⁾（図1中のa）である。

また、「略図」中の西出丸の部分には、北側に「中川寿林」（図1中のb）、南側に「下川又左衛門」（図1中のc）の記述があり、これらの部分は両者が管轄する区画であったことがわかる。下川又左衛門と呼ばれた者は、下川又左衛門元宣と下川又左衛門元真の親子二人である。父の元宣は、加藤清正の重臣であり、清正の熊本入国期以来、その政務を補佐した筆頭家老であったが、慶長17（1612）年に死亡している⁶⁾。その後は、子の元真が加藤忠広の改易まで忠広政権を仕えている。

中川寿林は清正の従兄弟で、侍筆頭格であった人物であり、清正期には、下川又左衛門元宣の政務を補佐し、元宣と共に熊本城留守居役であった。忠広が、清正の遺領を相続した直後の慶長17年6月27日、幕府から肥後藩に九ヶ条の条令が出された後に中川寿林は重臣的役職から外れている⁷⁾。

加藤清正が死亡した慶長16（1611）年の時点で、下川又左衛門元宣と中川寿林が共に熊本城留守居役であったこと⁸⁾を考えると、絵図中の「下川又左衛門」は、父である元宣のことを示していることが考えられる。花島（畑）屋敷建設の時期と下川又左衛門元宣の死亡時期、および中川寿林が重臣的役職から外れた時期とを考えると、「略図」は、慶長15年から慶長17年6月27日までの間における熊本城の状況を示していることが考えられる。

4. 「略図」の作製経緯からみる熊本城の年代について

「略図」中の記述から、絵図中の熊本城は、慶長15年から慶長17年6月27日までの間の状況を示していることが考察された。これに加えて、「略図」が毛利家文庫の史料であるという点に着目し、これが描かれた経緯について明らかにすることで、「略図」が、具体的にいつ頃の状況を示しているのか考察を加えていく。

4-1. 萩藩による九州諸藩の内偵活動について

萩藩は、慶長16年12月26日の毛利秀就の初入国、および国内初巡視にあたり、熊本から北にある九州の諸藩（豊前・豊後・筑前・筑後・肥前・肥後）の実情を内偵している⁹⁾。

慶長5（1600）年の関ヶ原の合戦で東軍が勝利し、慶長8（1603）年には徳川家康が征夷大將軍の宣下をうけ、同時に右大臣に任ぜられたことで¹⁰⁾、この頃、徳川氏による全国統一が事実上成し遂げられた。また、慶長10（1605）年には、家康から秀忠へ將軍職が継承されたことで、徳川家による治世が今後続くことが確定的となった。しかし、その間も西国の諸大名は、万一の豊臣・徳川開戦の場合に備えて軍事力を強化していたことから¹¹⁾、徳川家康にとって、西国の諸大名は、何らかの対抗の手段をとらねば

ならない存在であったことは間違いない。その手始めとして、家康は、慶長16年4月12日、徳川幕府が事実上の全国統一を成し遂げた後、最初の法令とも言うべき「三ヶ条の法令」を近畿・中国・四国・九州の諸大名に示して、その誓書を徴した¹²⁾。このことにより、西国の諸大名は、徳川幕府が絶対的な存在であることを強く認識させられたに違いない。これらの背景から、西国の大藩の外様大名は、徳川幕府による軍事体制面の統一権力の確立を目的とした、支城の整理（城割り）が行われることを予測したのではないかと考えられる¹³⁾。

毛利氏の本城である萩城が、慶長13（1608）年に完成していることや¹⁴⁾、毛利家が関ヶ原の合戦で西軍に組したことを合わせて考えてみても、この内偵の主な理由は、近々出されるであろう城割令に対する準備¹⁵⁾について秀就と相談をするために、他藩の実情を把握するための情報収集を目的としたものだったのではないだろうか。実際のところ、元和元（1615）年に幕府より出された一国一城令よりも3年前の慶長17年6月27日には、熊本城の支城である宇土城・水俣城・矢部城が破却され¹⁶⁾、徐々に大藩における支城の整理が行われていることから、城割りに対する幕府の方針が、この頃すでに出来ていたことを窺い知ることができる。

4-2. 萩藩による肥後国内の内偵活動について

「略図」中の記述から考えられる「略図」が描かれた年代、慶長15年から慶長17年6月27日までの間において、萩藩は肥後国内を内偵しており、以下の2つの史料から、内偵の時期とその内容を知ることができる。

文書①「肥後国熊本様子聞書」（山口県文書館所蔵、毛利家文庫3他家-7ノ以下、「様子聞書」と略称）

「様子聞書」には、肥後殿（加藤清正）が、5月2日に大坂を発ち、5月15日に肥後へ帰り着く予定であったが、5月27日に体調を悪くしたため、治療を施したにもかかわらず、6月24日の朝死亡した事などについて書上げられている。

このことは加藤清正が、慶長16（1611）年3月28日、京都二条城における豊臣秀頼と徳川家康との対面に立ち会った後、熊本へ帰国の途中に体調を崩し、慶長16年6月24日に病死した際の状況¹⁷⁾について書かれたものである。また、「様子聞書」中の最後の一文に、「七月十日熊本ニ而著被申候」とあることから、「様子聞書」は、慶長16年7月10日に内偵先の熊本にて記されたことがわかる。

文書②「肥後国熊本世間取沙汰聞書」（山口県文書館所蔵、毛利家文庫3他家-16ノ以下、「取沙汰聞書」と略称）

「取沙汰聞書」には、肥後殿（加藤清正）の死後、とらふち（虎藤＝加藤忠広）が、その遺領の相続を受けるために江戸および駿府へ上がった事や、忠広の家臣の構成、支城の数などについて書上げられている。

「取沙汰聞書」が書かれた時期は、以下の部分から推定できる。

- 一 とらふち殿、上方御上り被成候、御下なく、すくさまにとめおき上方ニ御座候ハ、さつま殿と申合、上方より肥後を請取候ニ参申候も、渡し申間敷由之事、
- 一 在番より何事と申候へとも、さつまのしまつとの・ふせんの越中との、此兩人衆申合候て、にけ候之由、かちうにて所大め衆とりさた申候事、

- 一 国かへなどの由ハ不申候、少もとりさた不申候事、付とらふち殿御上り之時、御とも衆之事、
(中略)

- 一 道にてのきやうきはつとの事、
肥後殿時より、事之外きつき由申候事、

とあり、国替えなどの処置はしないという内容がみられることから、遺領の相続が許可されたことがわかる。また、上方に居た「とらふち殿」(虎藤殿=加藤忠広)が、上方(京都)より肥後(遺領)を請け取りに行くという内容がみられる。このことは、京都へ上っていた加藤忠広が、慶長17年6月6日、江戸にて徳川秀忠に謁見した後、8日に江戸を発ち、肥後への帰国の途中である6月14日に駿府に立ち寄って徳川家康に謁見したことで、公式に遺領の襲封を許可された際の状況¹⁸⁾を示すものである。

またこの文書中には、支城に関して以下のような記述がある。

- 一 肥後之老国之内城数之事〔※()内は著者による註記〕
本城十一り八つ城 (八代城)	めうし被遣衆
三千石
井藤新五左衛門尉
三千五百石
中川大郎平
本より三りウトの城 (宇土城)	八千石御ハンかと申
加藤興左衛門尉殿
三千五百石
中川しやうけん
(将監)
本城より廿四りさしき城 (佐敷城)	老万石
加藤馬允
(加藤右馬允)
一之としよりと申也
本城より卅二りミな又城 (水俣城)	御いんか衆 老万石
加藤たんこ (丹後)
本城より十一りウちのまき城 (内牧城)	八百
せ田又左衛門尉
老万石
御いとコと申也
加藤万兵衛
筑後さかへめ本城より十一り南のせき城
(南関城)	二千石
しま田助右衛門尉
本城五り高せ之城 (高瀬城)	三奉行内 二千石
加藤平左衛門尉
本城より十一りやへ之城 (矢部城)	同人大くわん所也
ふんこ二郡の内
本城より三日地九ちうの城 (九重城)	
同ふんこ内
本三日地のつはる城 (野津原城)	
ふんこ之つるさきやと、
(鶴崎)	

以上、本城共十一城数之事、

この当時、熊本城の支城は、肥後内に8城と豊後内に2城で、合計10城あったことが記されている。

前述したように、慶長17年6月27日に、熊本城の支城である宇土城・水俣城・矢部城の破却と、加藤右馬允が内牧城代から八代城代へ、加藤万兵衛が矢部城代から内牧城代へと移動となることなどを含んだ九ヶ条の条令が幕府より出されていることから¹⁹⁾、「取沙汰聞書」が、慶長17年6月27日までには記されていたことが考えられる。

これらのことから、「取沙汰聞書」は、慶長17年6月(6日～27日)における肥後国の状況を記した史料であることがわかる。

また、「取沙汰聞書」の最後の一文には、「右之きゝ様事、京町にて惣兵衛へと申候人之所ニやと仕候て、色々きゝ合可申、中九日と

逗留仕て、きゝ申候、」とあり、この時の内偵が、京町の惣兵衛という人物の所に宿をとって、中9日間行われた事がわかる。

4-3. 萩藩の内偵活動と「略図」との関連性について

以上の二つの文書より、萩藩による肥後国内の内偵は、慶長16年7月10日と同17年6月の二度行われたことがわかったが、ここではさらに「略図」が描かれた際の状況について考察を行っていく。

「略図」と同じく、山口県文書館所蔵、毛利家文庫の絵図「九州諸城圖」(58絵図-822/以下、「諸城圖」と略称/写真3)は、豊前小倉城から肥後熊本城までの間に位置する各城(小倉城・若松城・福岡城・佐賀城・柳川城・南関城・熊本城)の城図とその間の道程を記した絵図である。前述したように、萩藩による九州諸藩への内偵先は、豊前・豊後・筑前・筑後・肥前・肥後であることから、この「諸城圖」は、萩藩による北部九州諸藩の内偵先の内、豊後を除く豊前小倉城から肥後熊本城までの南北の行程を記した絵図であることが考えられるのである。その理由として、「諸城圖」が描かれた年代についてみていく。

「諸城圖」中の「南ノ関城」(南関城)の城主が「加藤美馬坂殿」(加藤美作殿)と記述されている。加藤美作は、清正が朝鮮の役から帰朝後に重臣となり、慶長16年7月には、すでに南関城代であった²⁰⁾。元和4(1618)年8月2日には、「馬方・牛方騒動」の処分で、越後村上丹後守へ配流され、忠広時代の途中で肥後を去っているが²¹⁾、南関城は元和元(1615)年6月13日に出された一国一城令によって廃城となっている²²⁾。また、「筑後」・「大川」・「田中隼人殿」と記述されている箇所は柳川城であるが、田中隼人が柳川城主であった期間は、慶長14(1609)年4月3日から元和6(1629)年8月7日までである²³⁾。

これらの記述から、「諸城圖」は、慶長14年4月3日から元和元年6月13日までの6年間の内に描かれたものだと考えられる。また、萩藩が内偵した北部九州諸藩の地域と、「諸城圖」の範囲が合致していることを合わせて考えてみても、萩藩が北部九州の諸藩を内偵した時期(肥後が内偵をうけた時期)である慶長16、17年のいずれかに「諸城圖」が描かれたことが考えられるのである。

「諸城圖」によると、豊前小倉城から肥後熊本城までの道程は、北から南へ小倉城-若松城-福岡城-佐賀城-柳川城-南関城-熊本城の順序で記述されており、熊本城には、筑後の本城である柳川城、熊本城の支城である南関城を経て入国していることがわかる。

「略図」は、柳川城を中心とする筑後諸城の配置図と熊本城図が一对となって描かれている絵図であることは前述したが、ここでその理由が説明できる。「略図」は、慶長16年または同17年、萩藩による北部九州諸藩の内偵の際、筑後の本城である柳川城を中心とし、その周囲の諸城を内偵した後に、肥後の本城である熊本城を内偵したことから、筑後諸城の配置図と熊本城図とが一对となって描かれたと判断されるのである。

また、「諸城圖」は、同じ内容が描かれた二枚の絵図から成っており、このことは「略図」とも共通した構成である。これらの絵図を構成する二枚の絵図の関係はどちらも、一方が粗く描かれ、もう一方が丁寧に描かれていることから、基本的には「下書」と「清書」という関係にあると思われるのだが、その意味するところは、一方が内偵の際に描かれた絵図(以下、調査図)で、もう一方が萩城へ帰った後、藩へ差し出すために描き直された絵図(以下、差出図)

であると考えられるのである。

また、「諸城圖」と「略図」の調査図と調査図、差出図と差出図を比べてみると、その様相や、幹の反りなどの建物細部の表現が極めて良く似ており、これらの調査図は同じ内偵の際に描かれたことが考えられるとともに、調査図と差出図は別の人物(「内偵した者」と「差し出すために描き直した者」)が描いたことも合わせて考えられるのである(表1)。

「略図」の場合、「両城圖」は「城圖」に比べて丁寧に描かれているが、文字や線の欠落があったり、櫓や各部の表現に簡略化がみられること、また「城圖」は「両城圖」に比べて、粗く描かれているものの、櫓などの建物の表現は緻密に描かれていることから、「城圖」が調査図で、「両城圖」が差出図であることが考えられる(表2)。これは「城圖」の方が、内偵先の熊本において、実際に熊本城を見ながら描かれたことを示すものである。

萩藩が、北部九州諸藩を内偵した際に作成した文書²⁴⁾には、各藩の支城に関する調査がなされ、その調査項目は一様に同じである²⁵⁾。また、この調査項目は、「略図」中で熊本城と一対で描かれている筑後諸城の内、その本城である柳川城の文書中においても全く同じである²⁶⁾。このことから、熊本城の支城について、内偵を受けた藩と同様な調査がなされている文書②「取沙汰聞書」は、「略図」(「城圖」)が描かれた内偵の際に記された文書であることが明らかになるのである。

したがって、文書②「取沙汰聞書」が書かれたのは、慶長17年6月における内偵の際であるから、「略図」は慶長17年6月における熊本城の状況を示す絵図であると判断されるのである。また、このような調査項目から、この内偵時において、萩藩が幕府による支城の破却令を意識していたことが確認される。

5. まとめ

萩藩は、慶長16(1611)年と同17(1612)年の二度、肥後国を内偵している。この内、慶長17年の内偵は、北部九州の諸藩(豊前・豊後・筑前・筑後・肥前・肥後)を対象としたものであった。この内偵の主な目的は、この頃幕府から出されることが予想された、西国の大藩における支城の破却(城割り)命令に対する備えとして他藩の実情を把握するためであったことが考察された。

この内偵を受けた北部九州諸藩の内、南北の行程である小倉城から熊本城までの間に位置する各城の城図と、その間の道程を記した絵図が「諸城圖」であり、この絵図によって、萩藩の内偵者が筑後の本城である柳川城、肥後の支城である南関城を経て、熊本城に

入っていたことが明らかになった。

慶長17年6月、萩藩による肥後国の内偵の際に書かれた文書である「取沙汰聞書」と、同じく内偵を受けた筑後柳川城の文書には、各藩の支城に関して同様の調査が行われていることから、肥後熊本城と筑後柳川城とが一対となって描かれている「略図」は、文書②「取沙汰聞書」が書かれた慶長17年6月の内偵の際に描かれた絵図であることが明らかになった。また、「略図」および「諸城圖」は、内容が同じ二枚の絵図から成っており、その記載内容から、一方が実際に現場を観て描いた絵図(調査図)で、もう一方が萩藩へ帰った後、藩へ差出すために描き直された絵図(差出図)であることが判断された。

「[肥後熊本城略図]」は、加藤清正が慶長16年6月24日に逝去した後、その子である加藤忠広が遺領(肥後)を相続した直後の慶長17年6月、肥後を内偵した萩藩の内偵者によって描かれた絵図である。「肥後熊本城略図」は、略記されたと思われる所も見受けられるものの、加藤氏時代および慶長期の熊本城の状況を知り得る史料(特に建築物に関して)が極めて少ない中、加藤清正が築城した熊本城の状況を窺い知ることができる絵図として価値をもつものである。

また、加藤清正が逝去した後の慶長16年10月1日、幕府は肥後仕置きを監察するために藤堂高虎を肥後に派遣しているが、その役を終えた高虎は、慶長17年1月14日、肥後の絵図を携えて駿府にいる家康へと報告に上り、その後江戸にいる秀忠へも同じく報告へ上がっている²⁷⁾。高虎は、家康と秀忠に非常に親近であり、かつ幕府の築城策に大いに関与した人物である。この高虎が築城の名手である加藤清正築城の熊本城を沙汰したことは、この報告の内容が後に徳川幕府の築城策への参考となったことも考えられ²⁸⁾、「[肥後熊本城略図]」が示す熊本城の状況(慶長17年6月)は、この時高虎によって幕府へ報告された熊本城の状況(慶長17年1月)と時期的に近いものであるだけに興味深いものである。

次稿では、「[肥後熊本城略図]」中に描かれている建築物や縄張などについて詳しく考察を行うことで、加藤氏時代(慶長後期)の熊本城の特徴を明らかにしていきたい。また、本稿で取り上げた絵図「九州諸城圖」についても、今後さらに検討を加えていきたいと考えている。

【謝辞】

本研究にあたり、山口県文書館の皆様には、貴重な史料を提供していただきました。ここに記して、改めて御礼を申し上げます。

表1. 調査図と差出図の様相にみる「諸城圖」と「略図」の関連性について

絵図名 絵図 の性格	「諸城圖」			「略図」(熊本城部分)	
	熊本城部分	佐賀城部分		天守	櫓A
調査図			※I ⇄
差出図			※II ⇄

※I…櫓・天守が全体的に縦長い。※II…櫓・天守の各層が平べったく、軒の端がはねる。

表2. 「城圖」と「両城圖」の性格(調査図または差出図)判断箇所

絵図名 部分	「野」部分			櫓B
	西出丸西側	西出丸西側	櫓B	
「城圖」 (性格: 調査図)
「両城圖」 (性格: 差出図)
所見(相違点)	「野」という文字が欠落	石垣の長さが欠落	望楼部分が欠落	

The image displays two historical maps from the Qing Dynasty. The left map, titled '肥後後兩城圖' (Map of the Two Cities of Fiefu), shows a fortified area with internal divisions. The right map, also titled '肥後後兩城圖', shows a larger area with a grid system and a title box. Both maps are part of the 'Qing Dynasty Maps' collection.

[illegible]

[※ 図・写真中の () 内は著者による註記]

【註記】

- 1) 乃美家文書（所収：『肥後文獻叢書 三』歴史図書社、p. 199、昭和46年8月20日）、慶長十二年に「一筆申觸候隈本之文字之事今度御城出来に付御改候而熊本（後略）」あり、「台徳院殿御実記」（所収：平井聖監修・北野隆著『城郭・侍屋敷古図集成 熊本城』至文堂、平成5年4月20日）には、慶長十一年八月「加藤清正は熊本の居城に、親世をめてし申楽を張行し、（中略）申楽等数人を居城にめし国人に見物せしめ、（後略）」とある。
- 2) 「肥後国絵図（慶長国絵図）」（熊本大学附属図書館保管、永青文庫）、「加藤氏代熊本ノ図」（個人蔵、所収：『新熊本市史』別編第一巻絵図・地図上中世近世 平成5年3月30日）、「熊本屋鋪割下絵図」（熊本県立図書館所蔵）、「熊本図」（臼杵市立図書館所蔵、所収：北野隆『歴史群像・名城シリーズ熊本城』学習研究社、p. 81、2000年5月20日）
- 3) 加藤氏時代の絵図では、「肥後国絵図（慶長国絵図）」に、天守らしき建物の描写があるが、国絵図が国郡制に基づく国郡区画と国郡村の石高記載を基本要素とし、地図的要素や城の表現に記号図式の性格が強いことを考慮すると、この建物は、熊本城の所在を示すためのものだと判断され、まして熊本城の建築物の構成等は不明である。また「加藤氏代熊本ノ図」は、縄張の構成がわかるのみであるし、「熊本屋鋪割下絵図」では、建築物として門が描かれているだけである。「熊本図」には、八基の櫓が描かれているが、それらの北側の立面が一行に並べて描かれていることや、櫓の下層が塀に隠れているものも見受けられるため、その位置関係や櫓の全容が読み取りにくく、詳細を求め得ない。したがって、今までに確認されている加藤氏時代の熊本城の絵図には、建築物の構成とその状態を把握できるものは見当たらないが、細川氏時代の絵図においては、「御城圖」（熊本大学附属図書館保管、永青文庫）のように、天守や櫓の詳細を描いた絵図が存在する。
- 4) 熊本城の縄張や天守・櫓に関する論考としては、城戸久「熊本城宇土櫓造営年次私考」（建築学会論文集第30号抜刷）、藤岡通夫『熊本城』（中央公論美術出版、昭和51年4月20日）、北野隆「熊本城の宇土櫓について」（日本建築学会論文報告集第308号・昭和56年10月）、宮上茂隆「熊本城天守小天守および古天守の造営移築について」（日本建築学会大会学術講演梗概集1989年10月）、堀江保成・北野隆「熊本城の五階櫓に関する研究」（日本建築学会中国九州支部研究報告第10号・1996年3月）等がある。
- 5) 下川文書の「加藤清正黒印状写」（所収：『新熊本市史（史料編第三巻近世Ⅰ）』熊本市、p. 81、平成6年3月30日）には、大木土佐等へ宛てた文書の中で、「一花島作事、留守中番等無油断之由尤候、尚追而可申下候、謹言」とあり、花島屋敷作事の進行が窺える。また、大木文書の加藤清正書状（所収：中野嘉太郎『加藤清正伝』、青潮社、pp. 620-621、昭和54年9月1日）では、「（前略）やがて可歸國候、將又廣間作事之儀、先書に具に如申遣候、無油断仕舞可申候、並花島之作事も、廣間内雑作立候へば、申遣日限之時分相仕舞、其時日之役に立候やう可仕候、（後略）卯月十五日（慶長十五年）大木土佐どのへ中川口どのへ下川又左衛門どのへ」とあり、花島屋敷の着工時期は、本丸御殿の雑作が終了した直後の慶長15（1610）年と考えられる。ちなみに大木土佐は、加藤清正が死亡した慶長16年6月24日に殉死している。
- 6) 『新熊本市史（通史編 第三巻 近世Ⅰ）』（熊本市、平成13年3月30日）p. 148のⅡ. 5-6、p. 176のⅡ. 7-8による。
- 7) 「続撰清正記」中の「家来の者共の書立の事」（慶長十六年七月晦日）（前掲⁵⁾『加藤清正伝』所収、p. 555）には、中川寿林は熊本城留守居役として、重臣の立場にあり、文書①「様子聞書」（慶長16年7月10日）においても下川又左衛門と同じく三奉行衆であった。しかし、加藤清正の逝去後、忠広代の文書②「取沙汰聞書」（慶長17年6月）では、三奉行衆の中に中川寿林の名前が記載されていないことから、政治的に重要な役職から外れたことがわかる。
- 8) 前掲⁷⁾「家来の者共の書立の事」には、加藤清正の逝去後、その子である加藤忠広の継承を願い出た際の肩書に、「熊本城留守居の者共 清正といこ中川壽林 下川又左衛門」とある。
- 9) 「筑前国御国廻次第其外様子聞書」、「豊前国御国廻御供之次第其外様子聞書」、「豊前国所務方様子聞書」、「豊後国府内様子聞書」、「豊後国臼杵様子聞書」、「豊前国小倉世間取沙汰聞書」、「筑前国福岡世間取沙汰聞書」、「筑後国柳川世間取沙汰聞書」、「肥後国熊本世間取沙汰聞書」、「肥前国竜造寺世間取沙汰聞書」、「豊前豊後両国内所務方其外様子聞書」、以上の史料はすべて山口県文書館所蔵毛利家文庫。
- 10) 大類伸序・鳥羽正雄著『近世城郭史の研究』（雄山閣出版、p. 110のⅡ. 10-12、平成8年9月20日）には、「（徳川家康が自ら）右大臣は（慶長8年）10月16日辞任した。右大臣は信長が安土築城の翌年に任ぜられた官であって、覇者としての地位を形式的に示すものといえるであろう。」としている。
- 11) 「當代記」（所収：『當代記 駿府記』、統群書類従完成会、平成7年10月10日）、慶長12年8月15日の項には、「此二箇箇中、九州中國四國衆、何も城普請専也、亂世不違との分別職と云々、」、慶長14年9月の項には、「西國大名等、近年大船を併置、是自然の時催大軍可上敷之由云々、依之此舟ともを自駿府可有破却由日、先淡路國に可被寄と也。」とある。
- 12) 前掲¹⁰⁾『近世城郭史の研究』（pp. 159-160）では、この幕府の法令について、「これは、舟橋秀賢と林信勝として、『貞永式目』に文体を凝らして作らしたもので、家康が征夷大將軍となり、秀忠がこれをついだについては、頼朝以後代々の將軍の法令にならって出す幕府の法令を堅く守るようになんて、徳川家が正統な武家の棟梁として絶対なものであるということを再認識させるためであった。」としている。
- 13) 前掲¹⁰⁾『近世城郭史の研究』（pp. 180-181）では、城の破却（城割）について、小城の整理は、すでに戦国大名の朝倉氏が永録以前に越前国で行ったとし、天正八年頃信長は大和を平定した時、郡山の一城を除く外、国内数十の小城郭を破却せし

め、また秀吉は九州征伐を行った頃、「くにくにのしろわり候て、これいご、むほうなきやうにいたし申候」として、城割の方針を述べていることを指摘している。

14) 天幕江家雜記（所収：安藤紀一『萩史料』巻一、p. 4、山口県図書館所蔵）には、「慶長十三年六月萩城ノ工事全ク成ル」とある。

15) 木島孝之「肥前名護屋城の石垣における「城割」の実態と意味」（日本建築学会計画系論文集第480号、pp. 147-156、1996年2月）では、肥前名護屋城の石垣の崩壊が「城割」によるものであり、その「城割」の意味として、戦闘機能を剥奪し「城を使えなくする」という目的よりも、むしろ城郭の機能を停止・凍結させた、つまり「城を使わない」という意志を視覚的に表明するための儀礼的要素が強く作用したとする見解を提示している。つまり、「城割」は大名が幕府に対して、私戦の凍結の意を表明するために「主体的」に行った破却形式の可能性をもつことが理解できる。

16) 徳川幕府は、加藤忠広が所領安堵して間もない慶長17年6月27日、肥後の国政についての九ヶ条におよぶ条令を下した。「家忠日記増補」（前掲⁵⁾『加藤清正伝』所収、pp. 561-563）には、「一 水俣、宇土、矢部三ヶ所之城、可爲破却然者、（後略）」とある。

17) 「続撰清正記」中の「清正病に付て駿河へ使者差越事」と「清正逝去の事」（前掲⁵⁾『加藤清正伝』所収、pp. 548-551）には、加藤清正の逝去について、「家康公と秀頼公の御對面事目出度相済御暇被下、清正同年（慶長16年）五月下旬に熊本へ下着ある、船中より気色不例して次第次第に病重り、熊本へ着城の二三日過ては、舌不自由にして、物云事曾てならず、脉もよろしからざるによつて、治しがたかるべき（後略）」、「（前略）春秋五十歳にて本書の通六月二十四日に逝去也、（後略）」とある。

18) 「當代記」（出典は前掲¹¹⁾）と同じ 慶長17年6月6日の項には、「此間九州加藤肥後忠十二歳、出雲國主堀尾山城守十四歳、在江戸、今日將軍彼兩人有振舞、則本國に可上之暇を給、依之八日江戸を立上、」とあり、「駿府記」（出典は前掲¹¹⁾）に同じ 慶長17年6月14日の項には、「加藤肥後守自江戸歸來、出御前、御刀國次御脇指國光賜之、則歸國云々、板倉伊賀守以飛脚申云、仙洞御不例、友竹法印上御藥、少驗云々」とある。また、下川文書の「徳川家康領知安堵状写」（所収：『熊本県史料（中世篇第五）』熊本県、p. 386、昭和41年7月31日）では、「肥後国拾貳郡此高五拾壹万九千余石、并於豊後国之内貳万石、都合五拾四万石事、任亡父肥後守（加藤清正）存知來旨、全不可有相違者也、仍如件 慶長十七年六月十四日 加藤肥後守（加藤忠広）とのへ」とあることから、加藤忠広は、慶長17年6月6日に江戸城に登城し、徳川秀忠に謁見した後、6月14日に徳川家康の居る駿府へ行ったことで、遺領の相続を正式に許可されている。

19) 前掲⁶⁾の条令。「一 八代城代之事、加藤右馬允被仰付候然上者、彼地有之諸侍不殘、右馬允與力被仰付候但野尻久左衛門、蟹江與兵衛兩人者、熊本へ引越可爲在地事、（中略）一加藤萬兵衛事、内牧城代被仰付候、知行之事、當分於内牧城廻可被相渡事、付、於矢部諸侍與力徒侍妻子、内牧へ可引越事、」とある。

20) 前掲⁸⁾「家来の者共の書立の事」（慶長十六年七月晦日）には、「筑後堺 南関城代 清正といこ豊 加藤美作」とある。

21) 「馬方・牛方騒動」は、加藤清正の死後、政治軍事上の権力が喪失した加藤美作・丹後親子（牛方派）と、加藤忠広代になり逆に権力を増していった加藤右馬允正（馬方）派との権力闘争（御家騒動）である。これに対して、加藤右馬允正方から家老が元和4（1618）年5月11日に幕府に訴状を提出し、同年8月11日に將軍の裁断が下ったことでこの騒動に終止符がうたれた。国政を妨げた理由などから首謀者である加藤美作は、越後村上丹波守へと大名預りの身となった。

22) 八代城記（所収：前掲¹¹⁾、p. 202）には、「元和元年冬十一月二十九日壬寅下令ヲ於關國定一國一城ノ制忠貞因而南關城毀之唯府城ノ外八代ノ一城二有故殘之」とある。

23) 『断家譜 第二』（統群書類従完成会、昭和43年6月30日）では、田中忠政（隼人）の藩主就任と没年月日は、「慶長十四年己酉父吉政卒時証人而江戸罷在、故賜遣領筑後国一円三十三万五千石、台徳院様御一字拝領称筑後守、元和六年庚申八月七日病卒、葬諏訪山吉祥寺、法名傑岫玄英、」とあり、『藩史大辞典（第7巻九州編）』（雄山閣出版、昭和63年7月5日）では、田中隼人の藩主就任日は、慶長14年4月3日としている。

24) 前掲⁹⁾の史料。

25) 「□□老国之城数之事」と題して、（本城からの距離）・（支城名）・（城代名と城代知行高）という内容が調べられている。

26) 前掲⁹⁾中の「筑後国柳川世間取沙汰聞書」。前掲²⁵⁾の形式で、「ゑの木門城」・「ゑの津城」・「まつふ城」・「くる見城」・「あか池城」の5支城について記載されている。

27) 「駿府記」（出典は前掲¹¹⁾）に同じ 慶長17年正月14日の項には、「今晩藤堂和泉守来ニ于此所、是者去冬爲肥後國仕置御使赴彼國、則肥州之繪圖作之備御覽、此趣可言上幕下之由蒙仰、自是赴江戸云々、」とある。

28) 前掲¹⁰⁾『近世城郭史の研究』（p. 278）では、「幕府がその後、肥後国内の支城の廃止などを令したところを見ると、家康は築城に堪能な高虎をして、熊本城その他の状況を視察せしめて、その築城政策の参考にしようとしたのであらうと思われる。」としている。

（2002年5月10日原稿受理、2002年8月22日採用決定）